

論 説

カトリック装丁家黒澤武之輔の紀行文 「南洋群島」に関する一考察

渡 邊 千 秋 *

1. はじめに

第一次世界大戦ののち、帝国日本は「南洋群島」を委任統治領として管理することとなった。それとともに、現地の人々の宗教的ケアの徹底を求められた日本政府は、カトリック布教地としての歴史的伝統を考慮し、教皇庁と交渉を行った¹⁾。結果として、この地域で宣教・司牧活動を行うためにスペインのイエズス会士が派遣されたのであった²⁾。

日本のカトリック平信徒は、突如として自国の委任統治領となり、それゆえに日本の教会が宣教・司牧に関与すべき地ともなった「南洋群島」をどのように意識したのであろうか。その手掛かりをつかむため、本稿では、カトリック平信徒を主要な読者層とする『日本カトリック新聞』に掲載された「南洋群

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) この折の交渉詳細については、以下を参照されたい。皿木喜久『軍服の修道士山本信次郎』産経新聞出版、令和元年；高木茂樹「南洋群島のキリスト教政策－海軍とプロテスタント・カトリック両派との交渉をめぐる」『歴史学研究』775号、2003年、頁20-32；等松春夫『日本帝国と委任統治：南洋群島をめぐる国際政治1914-1947』名古屋大学出版会、2011年。
- 2) 渡邊千秋「日本占領下の『南洋群島』と日本カトリック教会」『青山国際政経論集』101号、2018年、頁161-162。なお、本稿では帝国日本の委任統治下に入った当時の文脈でカロリン諸島・マリアナ諸島・マーシャル諸島を指す語として「南洋群島」を用いるものとする。

島」に関連する記事のなかから³⁾、昭和10年に約半年にわたって連載された一連の紀行文「南洋畫行」に注目してみたい⁴⁾。

第一次世界大戦の結果、日本の委任統治領となり、日本の国際連盟脱退後も日本の統治下におかれた「南洋群島」は、植民地でありながら独立経済が形成された場所として認識されるとともに、帝国日本の防衛にとって不可欠な地点として戦略上重要視されることになるのである⁵⁾。そして、昭和8年の記録映画『海の生命線』のヒットにより、一般の人々にも広く知られる存在となった⁶⁾。人々の興味の高まりとともに「南洋群島」に関する詳細な解説書⁷⁾や写真集⁸⁾が出版されるなかで、カトリック教会関係者を主要読者層として想定する出版物が掲載した「南洋群島」関連の紀行文を、どのように位置づけることができるだろうか。

連載紀行文「南洋畫行」について

本稿で考察する紀行文「南洋畫行」は、著者である「六點生」自身が、自分自身の眼でみた「南洋群島」の姿を、昭和10年6月9日号から全18回にわたって『日本カトリック新聞』に記したものである。通常4ページで構成されている新聞の最後、つまり第4ページに、著者本人が描いたイラストとともに掲載された。回ごとに文章自体には長短があるが、18回という連載回数には、編集部の南洋ものを載せることへのこだわりと継続性を見出すことができるであろう。

著者の「六點生」が、昭和9年に実施した自分の旅をテーマにして、どの程度の期間にわたって執筆をするつもりであったのかは定かではない。

3) 昭和10年時点で、『日本カトリック新聞』にみられる「南洋群島」関連記事の掲載量は、満州、台湾、朝鮮などの量と比較すると、明らかに少ない。

4) 原文引用において、現代では差別的で不適切な表現が含まれるが、時代の文脈の理解のため、史料としてそのまま掲載する。また、史料の直接引用は旧字体のまま行う。

5) 海軍省海軍軍事普及部編『海の生命線』海軍省海軍軍事普及部、昭和8年、頁13-23。

6) 朝尾直弘他編『岩波講座日本通史第19巻』岩波書店、1995年、263頁。

7) 例として、保仙寅太郎編『南洋群島地理風俗大観：大日本帝国委任統治領』萬朝報調査部、昭和8年。

8) 例として、細川寫眞館編『南洋諸島寫眞帖：我等が海の生命線』東栄社印刷所、刊年不詳；二葉屋呉服店編『海の生命線我が南洋の姿：南洋群島写真帖』二葉屋呉服店、昭和10年。

行先は南洋と云へば、海の中に太い赤い線が引いてある赤道の近所で、黒ン坊がバナナを食つて鰐退治をしてゐる所ぐらゐに考へてゐた⁹⁾。

とあるとおり、彼は「南洋群島」について、非常に大雑把な地理的感覚しか持っていなかったようである。前もって知識を得ようとしたが、地図をみると小笠原諸島の向こう側にある点々でしかないの、いってみないことにはわからない、とあえてそれ以上調べることはやめたとも書いているのである。

それでも「六點生」が「南洋群島」に赴いた、ということは、逆説的ではあるが、行かなければならない理由があった、ということである。実は、「南洋畫行」連載中には移動の意図に関する説明はみられない。文章の内容は、南洋の様子を伝えることに終始している。しかし、彼が物見遊山ではるばる出向いたわけではないことを確認するため、まず執筆の背景にあった南洋行きの理由について述べておきたい。

六點生とはだれなのか

はじめに、「六點生」こと黒澤武之輔の人生を振りかえっておこう。明治21年1月18日に生まれた黒澤は、洗礼者ヨハネの霊名をもつカトリック平信徒であった。カトリック青年会の事業活動に従事し、「公教青年会」のために勤め先であった十五銀行を辞したという。またカトリック的出版物への協力を惜しまず、本稿で扱う紀行文が連載された『日本カトリック新聞』はもちろん、カトリック児童雑誌『海の星』や総合雑誌『聲』等に、時に「六點生」というペンネームを使用して、また時には実名の黒澤武之輔としての署名記事を書き、挿絵を提供した人物である¹⁰⁾。なお、彼自身が「圖案と装幀黒澤武之輔」として昭和7年正月の『日本カトリック新聞』に年頭挨拶の広告を打っている

9) 六點生「南洋畫行（一）水」『日本カトリック新聞』504号、昭和10年6月9日、4頁。

10) 松風誠人「追悼」『声』1009号、昭和37年、頁21-22。松風は黒澤の追悼記事を執筆する目的として「次の世代の人々が記録を調査するときの手がかりになるようにしておかなければならない」と述べている。なお、黒澤は、昭和35年5月8日に帰天した。

ことから、この当時、黒澤が自分の職業を「装丁家」と自認していたことがわかる¹¹⁾。長崎の黒島出身のカトリック平信徒である岡延右衛門が書いた詩集『ささやき』の装幀¹²⁾や、現在、千代田区の文化遺産となっている海老原商店の建築デザインに関わるなど¹³⁾、「南洋群島」行き以前の黒澤の本業における仕事は、現代においてもアート作品としての評価を受けうるものである。

このようなアーティストとしてのバックグラウンドをもつ黒澤の「南洋群島」への具体的な関与は、「パラオ鳳梨合資会社」の立ち上げに始まると考えられる。この会社は、東京市杉並区井荻に本店を、支店は南洋諸島パラオ諸島バベルダオブ島ガルミスカン植民区画地内第8号地区に置いて登記され、黒澤自身は、代表社員の1人として名を連ねた¹⁴⁾。とはいえ、黒澤自身にいわせれば、出資者は自分とは別人、ということであった。黒澤は、昭和14年の時点で、「南洋群島」へ旅した当時の自らの状況を次のように述べている。

私は五年前に南洋への関心を偶々降って来た罐詰工業に留めて赤道下の一孤島バベルダオブの叢林に開闢第一本の烟突を立て、其の先から烟を出す契機としての一個のいたづら者に過ぎなかつたのである。斷つておくまでもないが、私は天下の貧乏人であるが故に、事業の資金は勿論私の定期預金を見返りにしたわけでもなければ、公債を賣つて出資したわけでもない。私の背後には中世紀と二十一世紀とを合せて二等分したやうな考方をする資本家があつたのである¹⁵⁾。

昭和9年8月のある日、黒澤は、南洋帰りの人物Sを紹介された¹⁶⁾。その

11) 『日本カトリック新聞』325号、昭和7年1月3日。

12) 岡延右衛門『ささやき』厚生閣、大正12年。

13) なお、海老原商店の正面ファサードは関東大震災の後、昭和3年に制作された。山田将之「千代田文化遺産 看板建築 海老原商店と『海老原家資料』」『文化財ニュース』千代田区立日比谷図書館文化館、32号、2024年、頁4-5。

14) 『官報』2443号、昭和10年2月26日、2頁。

15) 六點生「南洋開發にカトリックの共存共栄」『聲』765号、昭和14年、50頁。

16) この人物の名前は具体的にされていない。

人物から、南洋庁のパラオ支庁がパイナップルの植民地を計画して移民を集め果実が実り始めたが、缶詰をつくる工場を起すものがないため、せっかくなったパイナップルが無駄になっているという話を聞いた。この事業に興味を持った黒澤は、周辺の知人らに呼びかけ、計画した予算よりも少額ではあったものの、出資者を獲得したのである。そうして、先に述べたこの南洋帰りの人物 S とともに必要な物資・食糧を荷物にまとめて、「山城丸」で「南洋群島」へとわたったのであった¹⁷⁾。パラオに到着し、南洋庁に工場建設・会社自営の開墾地貸下げを願い出て、工場敷地をガルミスカン植民地に 2000 坪、ガスパンで森林を自営耕地として貸下げられた。そののち、黒澤は、試作品をつくり、それを日本へ持ち込んで、商品としてのパイナップル缶の市場価値を確認して販路を開いたが、時を置かず、はやばやと退社を決めた¹⁸⁾。会社を辞するにいたった理由は、以下の言に端的に表されている。

当時のパラオ鳳梨合資会社の経済では、現地の人々の生活は、何としても保証しなければならぬが、工場以外の言はば非戦闘員である。私の生活費の出所はなかった。と云つて、十数人の生活と、機械の運轉とを背負つて、本業の繪を描きながら、辻褄を合せる程に有能にして無神経な私でも無かつた。増資か社債か、これも今の南拓鳳梨なら、いざ知らず、先物を賣つた手形の割引にも精一パイの當時では問題にならなかつた。そんな無理をしてまで、自分の月給を製造するにも當らないと考へたまでの事である¹⁹⁾。

黒澤が事業から離れたのちのことではあるが、昭和 11 年 11 月の勅令第 228 号によって「南洋群島」における開発を目的とした南洋拓殖会社令がだされ、国策会社である南拓鳳梨株式会社のもとに、パイナップル産業は統合されてい

17) 六點生「南洋開發に...」51 頁。

18) 販路開拓にあたっては、ライバルとなる台湾系の会社との争いを避けるよう配慮したようである。

19) 六點生「南洋開發に...」55 頁。

った、ということである²⁰⁾。企業の礎石をつくった人間として、黒澤は、自分の過去の行動にプライドをもちつつも、「南洋畫行」執筆時には自分が「南洋群島」におけるパイナップル缶詰産業の勃興に果たした役割には触れずに、あくまでも南洋への旅から受けた印象のみを文字にしたのであった。

「南洋畫行」に描かれた寄港地について

黒澤は、植民地を支配する日本人の目をとおした先住の人々に関するのどかな描写や、航海中もしくは上陸後の生活でみた自然への畏怖の感情など、彼以外の同時代人が「南洋群島」に関して記述した内容に類似する事項についても、この一連の紀行文にて記している²¹⁾。彼は日本からの移民の生活向上にくわえ、先住の人々の「指導」と「啓発」にも興味を持っていたと述べる。そのように、実際の事業以外の事柄にも気を配ることによって、全ての人々の共存共栄が導かれるのであり、仮にも「海の生命線」と呼ばれる未開の地に進出する企業家にはそのような視野が必要であると考えていた点では、他の人々の思考との類似性がみられるであろう²²⁾。

他方で、彼の紀行文には、南洋に存在するカトリック的なものに関する記述が多くみられる点が特徴的である。「南洋群島」という異世界で接したカトリック的で普遍的な事象について、旅程の時系列に沿って記しながら、幼児洗礼をうけたカトリック平信徒である黒澤は、自らの信仰を改めて確認したのではあるまいか。当時、「南洋群島」へ向かう人々は、一般に、日本郵船株式会社の船に乗ってコロール島を目指したという。黒澤の乗った「山城丸」は西回り線に用いられた大型船であり、横浜～サイパン島～テニアン島～ロタ島～ヤ

20) 丹野勲「戦前日本企業の南洋群島進出の歴史と戦略—南洋興発、南洋拓殖、南洋貿易を中心として」『国際経営論集』49号、2015年、頁29-30；倉田洋二、上杉誠、諸川由実代、笹倉江身子、安斎晃編著『パラオ歴史探訪：倉田洋二と歩く南洋群島』星和書店、2023年、83頁。

21) 明治期から昭和期にかけての日本人の南洋群島に関する考え方の移り変わりについては、矢野暢『日本の南洋史観』中公新書、昭和54年に詳しい。

22) 六點生「南洋開發に…」53頁。昭和14年には、黒澤自身が「共存共栄」「海の生命線」という語を使用していることに注目されたい。

ップ島～パラオ（コロール島）というルートをとる、約10日、2100海里（約3890 km）の道のりであった²³⁾。それでは、以下、このルートをたどりながら移動した黒澤の言説から、「南洋群島」に現存したカトリック的な事象に関するものを対象に、見ていくこととしよう。

「南洋畫行」副題と『日本カトリック新聞』発行日

回	副題	新聞発行日
①	水	昭和10年06月09日
②	海は中世紀	昭和10年06月16日
③	南國方丈記	昭和10年06月23日
④	元始の島	昭和10年06月30日
⑤	夕あり朝ありき	昭和10年07月14日
⑥	赤い蟹	昭和10年07月21日
⑦	ヤップの酋長	昭和10年07月28日
⑧	夢の日本	昭和10年08月04日
⑨	太陽讃歌	昭和10年08月11日
⑩	思考しない葦	昭和10年08月18日
⑪	アバイ	昭和10年09月08日
⑫	桃源記	昭和10年09月15日
⑬	山	昭和10年09月22日
⑭	島の天使	昭和10年10月13日
⑮	地獄に團扇	昭和10年10月20日
⑯	金	昭和10年10月27日
⑰	聲	昭和10年11月10日
⑱	歸島	昭和10年11月24日

サイパン島での経験に関する叙述

実際のところ、航海の途中の島々で上陸すると、黒澤はカトリック関連の建造物を探す。旅程6日目に上陸した「南洋の入口」であるサイパンでは、南洋

23) 倉田洋二他編著『パラオ歴史探訪…』62頁。

庁の施設と隣接したカトリック教会を訪問した。スペインと「南洋群島」の混沌とした様式でカトリック教会が建造されていることに対する驚きが次のように記される。

聖堂は外割と鐘樓だけがゴシック風のコンクリート作りで屋根は飲料水を取るために、南洋全體にトタン葺である。内部は天井も床も張っていない。祭壇からあたりの装飾に至るまで、原色や緑など極端な色彩を以て、西班牙と南洋を混淆した粗末な圖案を施してある。土間には高さ五寸位、幅も五・六寸位の無雑作なベンチが並べてある²⁴⁾。

また、黒澤は、先住の人々の建築技術を「稚拙」と評しているが、他方でそのエキゾチックな感性を称えて、日本にある教会建築に対する以上の魅力を感じているのがわかる。

此等の一切が見るからに、土民の工作らしい稚拙なところがあつて、此の地の風土にも趣味にも適した特種な感じを見せてゐる。成り切れない技巧を集めた日本の聖堂建築よりははずつと落付きがあつていゝと思つた²⁵⁾。

ともかくも黒澤は司祭館を訪れた。しかし、主任司祭は1000人もの告解を聞くため忙しいと言われ、黒澤と話す時間はとれなかったようである²⁶⁾。黒澤が、たとえ時間がとれてもスペイン語しか通じないのだから、というふう考えたところで、東京からやって来て現地で司牧にあたる日本人神学生Kを紹介された、という。

24) 六點生「南洋畫行（二）海は中世紀」『日本カトリック新聞』505号、昭和10年6月16日、4頁。

25) 六點生「南洋畫行（二）…」4頁。

26) 「告解」とはカトリック教会の秘跡の一つであり現代ではゆるしの秘跡と呼ばれる。罪の悔い改めを求める信徒の声を司祭が聞くことになるが、1人の司祭が1日で1000人の告解を聞くのは不可能であると考えられる。

神學校なら東京の自宅の近所で時々はミサにも行つて居る。そこのKさんに會ふために、千何百哩も船に揺られてサイパンまで来て、初めて會つた、名も言葉も分らない神父さんから紹介されたのだから運命といふものは妙なものだ²⁷⁾。

黒澤が日本人神学生 K と何を話したのかは不明である。しかしながら、このような神学生との出会いの描写から、スペイン人聖職者を頼りに開始された帝国日本支配下の「南洋群島」におけるカトリック平信徒むけの宗教政策には、昭和に入ってから、日本人がゆるやかに関与し始めていたことがわかる。

ロタ島での経験に関する叙述

黒澤は、つてのない上陸先でカトリック教会をさがすため、居合わせた人々に躊躇なく話しかけた。以下、寄港地ロタ島でのエピソードを記す。

突然忍びやかな足音がして、太い黒い脛が頬を掠めて通つて行く。「コンパニー」と呼びかけて起き上がる。—コンパニーは二人稱として運用される南洋の新語である。呼ばれた四十格恰の土人は立止つた。ポケットから煙草を出して火を付けてやると、ちよつと笑顔を見せて甘まさうにスパスパ吸ひ始めたと思ふと小脇に抱へたバスケットの中から、青い木の實を一つ取り出して、齒でカチッと音をさせて二つに割つた。黙って見てみると印籠のやうな竹筒から白い粉を出して割つた所へふりかけて、青い葉を吸ひ残りの巻煙草を紙共に捲き込んでむしやむしや噛み始めた。如何にも土人らしい恰好である²⁸⁾。

27) 六點生「南洋畫行（二）…」4頁。Kとされる神学生は、当時南洋に派遣されていた唯一の日本人神学生、小松茂であると考えられる。

28) 六點生「南洋畫行（三）南國方丈記」『日本カトリック新聞』506号、昭和10年6月23日、4頁。

これらの言からは、南洋の人々つまり未知の人々に対する黒澤の先入観が伺える。しかし、この場合、彼等を頼るしかない。そこで、知っているスペイン語とラテン語を並べてみたところ、黒澤は無事教会へと案内されることとなった。

自分はこの土人に教會の所在を訊かうと思つたので「カテドラル」と云つてみた。通じない。其次に「エクレジア・カトリカ」とやつた。もひとつ「パドレ」と云つた。これで大和民族とカナカ族との第一の交渉が了つて、彼を自分の先に立つて歩き出した。椰子の林を三四丁行くと、白亜の御堂が草叢の中に立つてゐた。この白亜は珊瑚礁の手ごろに割つたブロックを、コンクリートで継ぎ重ねたもので、南洋一帯に使用される建築材料である。マルコポロに云はせれば「珊瑚の家」である。土人はそこまで来て、「あれが聖堂で、向ふのがパドレの住宅だ」といふらしい事を云つて元の道へ歸つて云つた²⁹⁾。

一見するとバラックにみえる司祭館で、黒澤は誰かいないかと呼びかけてみた。

(……)「パドレ」と奴鳴つてみると、奥の窓の光の中に黒い人影が動いて、一人の修道士らしい人が戸口に現れた。日野山の聯想は、此の人の出現によつて打消されなかつた。修士の瞳には突然の來客に對する物珍らしげな一瞬時があつた。次で「自分はカトリックだ」と英語で言つて、鼻の頭を指で押へて見せた時に、彼は更に眼を瞑つて奇聲を發した。そして何か立て續けに喋り始めた。無論例のスペイン語だから珍分漢だが、「主任司祭が島の奥の部落へ巡廻に行つて留守だ」といふ事だけは手真似や素振で諒解出來たあとは、人間が斯様な場合に云ひさうな事を此方で勝手に決定して、夫れに對する受答へをして居れば、大抵事は済むものである³⁰⁾。

29) 六點生「南洋畫行（三）…」4頁。黒澤が情報に對するお礼として与えたのは煙草であつた。

30) 六點生「南洋畫行（三）…」4頁。

こうして、言葉は通じないまでも、スペイン人修道士によって、椰子の一種で屋根をふいた南洋風の教会の聖堂に案内された黒澤は、修道士の名前が「ミゲル」であると理解する。そして彼の衣類の綻びや、素足で歩く様子など、風貌を評して言うには、鬼界ヶ島へ流された俊寛そっくりであるとのことである。二人で聖堂に入った折、このような宣教師の存在に対して神に感謝をささげる。信仰がこの二人を繋ぐ。

鳥は林を舞ふ、取りにあらざればその心を知らず、とは云へ絶海の孤島に身心を獻げるこの人に感謝の涙を禁じ得ない。烈日の下に、痩せ衰えた修士と手を握つて立つた。「デオ・グラジウス」と修士が言つた。「デオ・グラチアス」と自分も云つた³¹⁾。

ヤップ島での経験に関する叙述

ロタ島を去ったのちに上陸するのはヤップ島であつた。2昼夜かけて到着し、無事上陸を果たした黒澤は、周囲を観察する。そこで、丘の一番高いところに白い十字架をみつけ、教会の位置を確認した。南洋庁支庁を横目に丘のほうへ向かっていくと、自分の前の方に聖職者と思しき人を見かけたため、彼の後をついていった。そして予想通り、教会に行き着くのであつた。

スクールを廳舎の軒に避けて、雨後の湿った白い道を山の方へ行くと、前方に白服にヘルメットを被つた神父さんらしい人が行く。今船から著いた郵便物を局へ取りに行つた歸りと見へて、小脇に一束の郵船物らしいものを拘へてゐる。その姿を見失はないやうに尾いて行くと、豫想通り教會に著いた。今尾いて來た神父さんに刺を通じると、代つて出て來られたのは南洋教區の司教ポンス師であつた³²⁾。

31) 六點生「南洋畫行（三）…」4頁。

32) 六點生「南洋畫行（四）元始の島」『日本カトリック新聞』507号、昭和10年6月30日、4頁。

ポンス神父は英語を話し、黒澤を聖堂に案内しただけではなく、彼がスケッチブックを抱えていることに気がつき、聖堂の内外を自由に写生してよいとの許可を出した³³⁾。

黒澤は先住の人々の出会いにもカトリック的な逸話を見出す。たとえば、子どもにキャラメルを与えようとして話しかけた事に関連して、以下のように描写する。

土人の子供が一人向ふの方からやつて来た。子供は五六間先まで来ると、立止つて不思議さうな顔付をして自分を眺めてゐる。「キャラメルやらうか？」とポケットから函を出して見せる。まだ黙つてゐる。此方から近付いて「さあキャラメルあげよう」と鼻の先へ突きつけると、やつと手を出して「アリガトウ」と云つた。日本語だ。一折角軽くなつた體がまた前のやうに重くなる。「オヤ君カトリックかい？」彼は頸にスカブラのメダイをかけてゐる。子供は黒い顔の中で眼玉をグルッと回轉させて肯いた。「センセイモカトリックデスカ？」と電報のやうな日本語で云ふ。「ソウダ、カトリックダヨ」と此方も電報語で返電する。彼は自分を先生と云つた。此の島で洋服を着てゐる者は南洋廳の役人と公學校の先生だけなんだらう。日本人から役人を引くと残りは先生といふ答えが出る。彼の判断は數學的だ³⁴⁾。

ヤップ島では、酋長を訪問する。その勢力は遠くパラオの群島にも及ぶほどの強豪だと船内で知り、ぜひ会いたいと、その名前や住所を控えたというのだ。そしてそこでも、カトリックとしての先住民リーダーの姿を見出すことになるのであった。

33) 六點生「南洋畫行（四）…」4頁。ヤップ湾をいれて2・3枚のスケッチをしたとの記述があり、この回に挿入された黒澤の画は、この折のスケッチではないか、と思われる。

34) 六點生「南洋畫行（六）赤い蟹」『日本カトリック新聞』510号、昭和10年7月21日、4頁。

黒澤がハローと呼びかけると、イエス、と英語で答えが返ってきた。先住民を教化する目的では、宣教師は英語を用いないのではといぶかしく思った黒澤であったが、尋ねてみるとやはり神父から教わったということである。酋長の周辺にいた他の人々のなかにも、カトリック信徒がいたので、マリアの絵を預けたという。

「君は英語をどうして覚えたんです、僕には不思議に思えるが?」「カトリックの神父さんから習ったのです」「すると、君はカトリックですか?」「さうです、カトリックです」「僕もカトリックだ」といふと、今度はその隣りに座ってゐる幕僚らしいのが例の電報語で「アナタハカトリクデスカ、ワタシモカトリクデス」と云った。この一團はルボン幕下の士分級で皆扇子のやうな櫛を角のやうに指してゐる。その中にカトリック信者が酋長共四人居たので御繪を四人に預けて、「これは日本の聖母だ」と云ふと、ルボンは「日本にも聖母があるのか」といふやうな顔をして居た³⁵⁾。

紀行文に登場した人物の「その後」を考える

その後、「南洋群島」の中心地、パラオに到着した後の黒澤の「南洋畫行」は、自分の目に留まった先住の人々の「珍しい」風習などを記すものとなった。カトリック的なものへの言及がみられることはなく、文字数自体も減少傾向にはいり、全18回の連載は昭和10年11月24日の『日本カトリック新聞』第528号への掲載をもって終了した。

『日本カトリック新聞』への連載終了後も、黒澤は、昭和14年夏には、当時東京の麹町にあったイエズス会の南洋供給部オフィスを訪れ、その訪問記を実名記載で雑誌『聲』に執筆した³⁶⁾。とはいえ、「六點生」としての黒澤は、

35) 六點生「南洋畫行（七）ヤップの酋長」『日本カトリック新聞』511号、昭和10年7月28日、4頁。

36) 黒澤武之輔「南洋教區供給部訪問記」『聲』764号、昭和14年、頁59-62。ここでは実名で執筆を行った。

『日本カトリック新聞』以外のカトリック的出版物にも南洋に関する文章を載せてはいるものの、あくまでも「南洋群島」ののどかな姿を描き続けた³⁷⁾。また、そこで黒澤が自身の旅で出会い「南洋畫行」のなかで具体的に触れた人々への言及はなされることはなかった。

先述の昭和 14 年のイエズス会南洋供給部訪問では、そこで働くスペイン人イエズス会士、ヘレロス神父やベルガンサ神父にインタビューを行った。黒澤は、供給部が物資の管理・送付の場としてのみでなく現地で働くイエズス会士の一時的休息の場となり、「南洋群島」を管理する帝国日本政府についての知識を深める場となつてほしいという希望を持った³⁸⁾。しかし「南洋群島」への関心を持ちつづけたとはいえ、黒澤自身が「南洋群島」へ再び旅をすることはなかったようである。

日本が太平洋戦争に突入すると同時に、スペインは日本の交戦国ではなかったものの、スペイン人宣教師に対しても、監視、尋問、などの厳しい処置がとられはじめた。激戦地に変貌を遂げゆく「南洋群島」と日本との行き来が困難を極めるなかで、黒澤が過去の「南洋群島」行において現地で出会った聖職者や先住民のカトリック信徒のその後の消息を知することは、物理的にできなくなったのではないだろうか。

しかし、実際には、これらの人々のうえにも、黒澤との邂逅以降、時間は過ぎていったのである。以下、黒澤が彼等との出会いを名前とともに記した「ミゲル修士」と「ポンス司教」の辿った運命について、確認してみよう。

「ポンス司教」は、イエズス会士ファン・ポンス神父のことを指す³⁹⁾。太平洋戦争開戦直後の 1941 年 12 月 9 日には、すべての宗教行事の実践が禁止され、

37) 六點生「エデンの夢の續き」『聲』764 号、昭和 14 年、頁 46-49; 六點生「椰子の樹蔭」『聲』775 号、昭和 15 年、頁 58-60。

38) 黒澤武之輔「南洋教區供給部…」62 頁。なおヘレロスは原語ではエレロス (Herrerros) である。

39) 紀行文が執筆された昭和 10 年に「南洋群島」をおさめた司教はイエズス会士、サンティアゴ・ロペス・デ・レゴである。彼は 大正 12 年からその地位にあった。Ángel SANTOS HERNÁNDEZ: *Jesuitas y obispos. Los jesuitas obispos misioneros y los obispos jesuitas de la extinción*, vol.2, Madrid, UPCO, 2000, pp.325-326.

その翌日には警官が、司祭館まで、宣教師全員を抑留するためにサイパン支庁へ出向くように命じにやってきた。ちょうど、10月にロタ島から病の治療のためサイパンへやってきていたポンス神父は、化膿により足が腫れあがり動けなかったため、そのまま軟禁となった⁴⁰⁾。その後、ポンス神父は体調を回復せず、1944年3月に病死した⁴¹⁾。また「ミゲル修士」、つまりイエズス会のミゲル・ティモネール修道士は、ロタ島で、1944年6月、日本人兵士によって殺害されたと報告されている⁴²⁾。

おわりに

昭和10年の段階で、黒澤は、自らのまなざしと筆で、「南洋群島」に住む人々ののどかな姿を読者に印象づけた。太平洋戦争開戦以前の時代に、商業目的で南洋に出向いた黒澤は、「南洋群島」における缶詰会社の立ち上げからその譲渡までの1年ほどの期間でおきた、現地に暮らす人々と自分との接触経験を描いたのである。「熱心なる信者の諸相を展望⁴³⁾」していると評価された彼のカトリック的な事象への注目度合いを除けば、彼が描いた南洋の姿は、他の多くの同時代の庶民視線のものと類似しており、「体験に即して調和的⁴⁴⁾」なもののままで推移したように思われる。その後、南洋開発にカトリック的共存共栄という文言と共に『聲』に掲載された文章が象徴的であるが、太平洋戦争開戦が近づき時代が下るとともに、帝国日本の国策との整合性を考慮した執筆活動を行うに至った。

40) Provincia de Andalucía de la Compañía de Jesús: *Carolinas. Anuario 1947. Héroes. Misión de las islas Carolinas, Marianas y Marshall*, 1946, p.17.

41) Provincia de Andalucía de la Compañía de Jesús: *Carolinas. Anuario 1945. Misión de las Islas Carolinas, Marianas y Marshall*, 1944, p.177. ポンスは司教ではない。執筆者の黒澤のみならず、新聞発行者にも事実確認の努力が不足していることは明らかである。

42) «Informe oficial sobre la muerte de nuestros misioneros de Rota (Marianas), Yap y Palaos (Carolinas)», *El Ángel de Carolinas*, núm.146, marzo 1947, p.6. 黒澤の言からは苗字はわからないが、この宣教区で活動したミゲルという名のスペイン人宣教師はこの人物のみであるため、同一人物と判断する。

43) 「編集室より」『聲』724号、昭和11年、73頁。

44) 矢野暢『日本の南洋史観』156頁。

現在に至るまで、帝国日本の支配下にあった「南洋群島」におけるスペイン人宣教師の活動の一端は、あの瞬間に彼らと実際に接した日本人、黒澤の文章のなかに残る。日本の敗戦によりその暴力的支配から解放されたこの地域のカトリック宣教・司牧活動がスペインのイエズス会からアメリカ合衆国のイエズス会へと引き継がれるなかで⁴⁵⁾、黒澤が再び「南洋群島」を想起しようとしたのか否かについては不明である。そして、黒澤の死後、カトリックであると自認する人々のあいだでも、その無関心とともに、彼が描いたカトリック的「南洋群島」の姿は、忘却のかなたに追いやられようとしているのである。

45) Santiago NAVARRO DE LA FUENTE: «El final de la misión de los jesuitas españoles en Marianas y Carolinas tras la Segunda Guerra Mundial: 1945-1947», *Aportes*, 118, 2025, pp.241-242.

Resumen

Análisis crítico de una serie de ensayos titulada «Viaje artístico a las islas del Mandato del Pacífico Sur» del diseñador católico japonés, Takenosuke Kurosawa

Chiaki Watanabe

El presente artículo analiza el discurso desarrollado en los ensayos publicados en 1935, en el semanario *Periódico Católico de Japón*, por el escritor católico que se autodefinía como diseñador artístico. Kurosawa estableció vínculos con los ambientes empresariales japoneses y llegó a desempeñarse como ejecutivo de una empresa fabricante de latas de piña fundada en las islas Carolinas. Por motivos comerciales, viajaba de Tokio hacia dicha región. A su regreso a Tokio, elaboró y publicó los ensayos a partir de sus experiencias y reflexiones personales. En cada escala insular, Kurosawa observaba detenidamente el entorno local con especial atención, dada su condición de católico practicante, a los elementos vinculados con el catolicismo — iglesias, campanas, misioneros, fieles — que registraba y preservaba en su memoria. En este estudio se examinan las perspectivas singulares de la «catolicidad» en dichas islas.

本研究は JSPS 科研費 JP 24K15441 の助成を受けたものです。